



## 育てる「競争」ってどうするの？

朝輝千明

私ごとだが昨年「リレー」の実践を小4で行った。個々の「速い・遅い」、「勝った・負けた」など、様々な能力観を持った子どもたちだったが、実践を通し、「みんなが楽しめるリレー（競争）＝勝ち負けが分からない＝速さが平等なチーム」が良いと実践を通して感じられたように思う。仲の良いメンバーばかりではないという仲間と練習する中で、仲間同士の関係も変わってきた。最後の「競争」の集大成である競技会では見事全チームがベストタイムを出した。最後の感想ではどの子もまたこのチームでやりたいと言い、子どもたちの能力観が変わったのだと感動した。

しかし、その後の球技「フラフト」実践では単に点数だけを競うものになってしまった。もっと教える中味があったはずなのに自分の中に明確にそれが持たず、なんとなく授業をしていた。更に力が平等になるようチーム分けをしたはずなのに、差が出てきてしまい、勝利のみを追い続ける学習になってしまった。得意な子が自分の主張を強め、周りはその子に気を遣う。運動能力がそのまま人間関係に反映されてしまい、それを覆すことができなかった。それは私の競争に対する認識の浅さがあったからだと思う。

スポーツにおいて「競争」は常についてくる

ものだが、その扱いはとても難しい。「フラフト」実践で私はどうしたらよかったのか。自分たちが上手くなったと思える「競争」の方法があれば、結果の見方も変わるはず。そこで子どもたちが自分から学ぶ喜びや意欲が生まれ、お互いを認め合い、自分の自信にもつながるのではないか。では、競争とどう向き合ったらよかったのか知りたくなった。

普段の学校生活・放課後の習い事など四六時中、競争に巻き込まれている子どもたち。一般的にはその競争でお互いをライバル視し分断されることが多いだろうが、教師が競争の捉え方を多面的に持っていることで子どもたちがつながる競争が生まれるのではないか。

体育のそれぞれの教材において、みんながわかって・できる実践を進めるためには何を大切にしたらよいのか。それぞれの実践には同志会の競争観が反映されているはずである。今回はいくつかの教材紹介を通して「競争」を単なる勝ち負けではなく、一人ひとりの成長やチームの成長が感じられる競争とはどんなものなのか考えたい。読者の皆様もご自身の実践に活かされるような特集になればと願っている。

(あさひ ちあき／大阪支部)